

「故郷は変わったのか」－立論②－

「変わらない」側の立論

司会 では、次に、変わらない側の立論を始めてください。時間は同じく3分です。

(変) 変わった側 (不) 変わらない側

笹本 (不) これから、私たちの立論を述べさせていただきます。

私たちが、「故郷は変わっていない」ことを主張する根拠は2つあります。その第1は、「わたしの心境がかわっただけ」ということ。第2は124ページ14行目と140ページ15行目に「紺碧の空」「金色の丸い月」など同じ光景が象徴的に述べられているからです。

まず、第1の根拠についてご説明します。1919年、魯迅は帰郷して北京へ引っ越しをしました。この頃、中国では孫文による辛亥革命が起こり、共和制がしかれました。そして、魯迅は文部省の役人になりましたが、この制度に反動的な北京政府が、賛成派の人々を力づくで押さえつけました。

そんな中で魯迅は、その難を逃れるために転々と住居を変えたのです。この話では、魯迅と「わたし」は別人だと言われていますが、この場面はどちらも家を離れるということなのですから、ここでは、魯迅と「わたし」は同一人物とまではいなくても、とてもよく似た人物になると思います。

このような苦しい弾圧の中で「わたし」は故郷へ別れを告げにきたのですから、故郷が変わったように見えたのもわかるような気がします。しかし、変わったように見えたのであって、決して変わったわけではないと思います。

そこで、第2の根拠が出てくるわけです。124ページ14行目に、「紺碧の空に、金色の丸い月が懸かっている。その下は海辺の砂地で、見渡すかぎり緑のすいかが植わっている。」と書いてあります。そして、140ページ15行目にも「海辺の広い緑が浮かんでくる。その上の紺碧の空には、金色の丸い月が懸かっている。」と同じ光景が述べられているのです。

このことから、故郷は変わっていないことがわかると思います。また、「わたし」が帰郷したときは、建物やその場の雰囲気、確かに故郷は変わったと感じたでしょう。しかし、ルントウやヤンおばさんに会い、「わたし」は昔の故郷を思い出したのです。思い出してみたところ、やはり、故郷は変わっていないと感じたから、20年前と同じ光景を象徴的に述べたのではないのでしょうか。

もし、故郷が変わっていたら、昔の故郷を思い出しても、このように同じ光景を述べることはできないと思います。

以上の内容をもって、私たちの立論とさせていただきます。ありがとうございました。

司会 ありがとうございます。時間は2分42秒でした。では、続けて、これから2分間の作戦タイムに入ります。変わった側、変わらない側、それぞれ作戦を開始してください。判定者の皆さんは、判定表の立論の欄に5点満点で点数をつけてください。